「なぜだろう」と追究すること

暑くなってきました。梅雨は明けていませんが、本格的な夏が確実に近づいていますね。六月は梅雨真只中（まっただなか）なのに、どうして「水無月」なのでしょうね。「空梅雨（からつゆ）」ならともかく、雨がたくさん降るのが梅雨ですからね。不思議に思いませんか。

国語の授業を参観すると、黒板の右端に「月の異名（和風月名とも言います）」が書かれていますね。日本独自の月の呼び方として生徒の皆さんに覚えてほしい、という思いから授業者が書いています。日本文化に触れさせたいという国語科教師ならではの愛情ですね。

だからこそ、です。だからこそ、不思議に思ってほしい、水がたくさんあるはずの月なのに、どうして「水無月」なのか、と。そう思うことが、日本文化をより深く理解することにつながっていきます。

諸説あります。一つは「無」の字は、今の日本語の「の」にあたり、意味は「水の月」となるということです。具体的に言うと、「田に水を引く月」ということです。ちょうど今、田を見ると田植えの最中ですね。まさに「水の月」です。これが一つ目の説です。

また、六月は、旧暦で現在の七月～八月頃のことを指します。梅雨明けして雨が降らなくなる時期のことです。したがって、この説で言うと、「水が無い月」でよいのです。

ここで出てきた「旧暦」ですが、「旧」があれば「新」もあるわけで、今の私たちは「新暦」で生活しています。その違いについて説明していると、このスペースでは足りませんので触れることはしませんが、要するに、旧暦を使っていた時に生まれた六月の異名を新暦になった今にあてはめて、私たちは使っているということです。本来は夏真っ盛りの時期を指す「水無月」を、六番目の月ということだけで今のこの時期のことに使っているのです。これが二つ目の説です。

少しややこしくなってきましたね。いずれにしても、「なぜそんな異名が日本にはあるのだろう」と思うことが大切です。知識として蓄えることも大切ですが、「なぜだろう」と追究することは、より深い理解より強い興味関心につながります。

十月の「神無月」。「十月は『神無月』というのだ」と覚えることは簡単ですが、それでは単なる「知っているだけ」にすぎません。どうして「神無月」というか考えてみてください。そこには面白いストーリーがありますからね。広い日本の中で、ある地方だけは、十月のことを「神在月」と呼んでいます。どこでしょうね。神様たちもＰＴＡ総会ならず、ＧＯＤ総会を開くのですね！

（六月一日 記）